

49. ジョークのトポロジー

トポロジーとはなんだろうかと、興味を惹かれて「位相幾何学=トポロジーとは何か」という本を読んだことがあった。この本の前半はまったく面白くなかったが、後半の「ジョークのトポロジー」という章に目が留まった。そこにはジョークについてトポロジー的視点から書かれていた。

ところで、専門家というものはとある事象を自分の専門分野に引きずり込んで考えるものだ。だから、私の文章も話題に即した文芸的ではなく、無味乾燥なエンジニア的視点から書かれていると評価されても返す言葉がない。

この章の内容を要約すると、論理で積み上げていった話を全く異なる視点からオチをつける方法に関する解説であった。この論理を使ってみるといろいろなジョークが生れる。

小耳に挟んだものは、フランス人のジョークだった。

幼い娘が「パパのおならは大きいのにママのおならはなぜ小さいの?」と。

パパ曰く「パパにはラツパが付いているからだよ」。

+++日本人でも同じじゃない!++

インドネシアのマランにいた時にジャカルタに出張することになった。早朝、マランから北上してスラバヤの空港に向かった自動車の車内の右側の席に座ったら、朝日が差し込んでとても暑い。そこで左側の席に移った途端に口が悪くて親友のインドネシア人の同僚が私をからかってきた。

「太陽に当たるために日本人がたくさんバリ島に来ているじゃないか。お前は日本人だから陽に当たるべきではないか」と。そこで反論。

「バリ島に来ている日本人たちは金を『使い』に来ているが、俺はインドネシアに

金を『稼ぎ』に来ている。だからバリに来ている日本人とは反対に、陽に当たらないようにしている」と。

反論はなし。内心「ざまあみろ」。

それから一時間。車内は沈黙に包まれた。

++ネヒネヒ++

この一時間後にスラバヤの空港からジャカルタ行きの飛行機に乗り込んだ。隣同士になった彼は座った途端に、客室内の本来なら No Smoking と書かれているはずのサイン灯がインドの文字で書かれていたのを指さして、

「おい、これはなんて読むか知っているか？」と偉そうに。

彼も私もこの文字を読めない。

「これはな、『シガレット・ネヒ・ネヒ』と読むんだ」とインド人さながら首を振るので、乗客が振り返るほど大きな声で笑ってしまった。

++オッキー++

このフライトの女性パーサーの大きな胸を指さして、「日本語でなんて言うんだ」と尋ねて来るので、教えてあげたところ、ニヤニヤしながら何度も繰り返して覚えたようだった。

数日後のこの出張のとある日の夕方、彼と他の日本人とインドネシア人仲間と一台のバスでホテルに戻ることになった。ぼんやりと外を見ていた私が日本語で突然叫んだ。「XXXX おっきー」と。彼以外の同行者たちは日本人も含め何が何だか分からないのでげげんな顔をしたが、彼だけが「どこ、どこ」と座席から振り返ってきょろきょろとその対象を探していた。

そこで、「ヤギだよ」というと彼はがっかりしたが、彼がインドネシア語でインドネシ

ア人たちに説明すると車内は爆笑の渦になった。

インドネシアの田舎では井戸がない家も多かったし、特にジャカルタ西郊の海岸線に沿った農村部では井戸水に塩分が含まれているので、村人たちは夕方に道に沿った灌漑水路で水浴びするのが一般的だった。

私は灌漑水路でのカヌー遊びの際に何度もひっくり返ったりしたので、農村地域の灌漑水路を流れる水は濁っているものの水浴用には問題ないことは保証できる。

++バナナの知恵++

この彼はただひょうきんなだけではなく、かなりの知恵者だった。日本では「実るほど首を垂れる稲穂かな」ということをインドネシア語で Ilmu Padi (イネの知恵)という。彼はそれをもじって Ilmu Pisang (バナナの知恵)と言っていた。

バナナの茎はどんなに切ってもそこからまた生えてくるが、実をならせると自然に枯れてしまう。バナナと同じように彼もジョークで友人達をさんざん楽しませたあと、早逝してまった。「バナナの知恵」。人生はこうありがたいものですね。閑話休題。

++善人++

ブラックジョークを作る場合には、相手の状況を良くわきまえたうえに自分はいくまでも善人であるという立場に立つことが必要だ。さらにはその証拠を示すとますますウケる。

現地の会社に勤めている上記のインドネシア人の親友は、会社の営業不振で給料が遅配になり、いつもピーピーしていた。

スリや置き引きの多いジャカルタの繁華街である Glodok に用事のために彼とでかけ、ちょうどお昼時になったので二人で昼食をとった。屋台で食事を先に済ませた私は彼の分まで払って外に出て休んでいた。そこに食事を済ませた彼がやって来て、

「俺の分はいくらだった」と財布を開けた。そこで、

「おい、こんなところで財布なんか開けるんじゃないよ」。

啞然としている彼に、

「スリががっかりするじゃないか。」

「スリといえども人を失望させることは悪いことだから」と独り言。

一瞬考えた後に彼は激怒してそれからしばらくは口をきいてもらえなかった。

(このジョークは「財布をすられるかもしれないから」という友人への親切な忠告が続くことが自然な流れであるのに対して、悪党であるスリの方に同情するという非常識さと彼に「お金がない」ことを重ねているから、思わず笑ってしまう。こういう説明をするのはヤボと昔から決まっているのだ。筆者のような)。

++預金通帳++

この彼と一緒に仕事をしていた時分、生活費をおろすために胸ポケットに預金通帳を入れて銀行に行き、帰りはおろしたお金と共にズボンのポケットに。

それを見ていた彼はこうからかう。

「銀行に行くときは残高があるので威張って通帳を見せびらかす。返ってきた時には残高がないので恥ずかしいからポケットにしまっているんだよな」

「ごめんよ、期待を裏切って。おろしてきたお金を通帳に挟んだら胸ポケットに入りきれなかったんだよ」

++負けず嫌い++

この彼がマランからジャカルタへの出張が決まった時、友人から 5000 ドル程度のルピアの現金をジャカルタに持って行って欲しいと頼まれ、渋っていると、

「お前、貧乏人だからなあ。こんな高額の現金を手にしたことがないからビビっているんだろう」と焚きつける。彼は、

「そうだよ。だって俺は高額の現金は持ち運んだことはないんだ。いつも小切手決済さ」と、ちょっと胸をそらす。

横で聞いていた私が目を細めて「ええっ、まだクレジットカード使っていないの！」と。

++人が良い++

インドネシア人は人が良いことで知られている。

1990年代に上記のインドネシア人の親友とスラバヤの電気屋街を歩いていて一軒の店で彼が足を止め商店主に尋ねた。「どうしてこの小さいラジオは横にある大きいラジカセより何倍も高いの？」

商店主はニコニコしながら胸を張って「小さい方は日本製のSONYで大きい方はインドネシア製のPolytronですから」と。それを聞いた友人はがっかりして私にこう言った。

「日本製は何でも良くて、インドネシア製は何でも良くない」と。

それを聞いた親切な私はこう慰めた。

「100%インドネシア製だって世界のトップクラスのものがあるぜ」。

「何それ？」と目を輝かせて喜びを浮かべた彼に

「それはインドネシア人だよ」と。

「？」とした彼にその理由を答えた。

「インドネシア人たちは『彼/彼女は良い人なんだけどね、…………』ってよくいうじゃないか」と。

この後もしばらく口をきいてもらえなかった。

私より五歳年上だったこの「口の悪い同僚」は大親友であり、一緒に出張するとジョークの応戦が続き出発二時間後には笑い疲れてぐったりしてしまうほどであった。彼からインドネシア語を習ったり、多数のブラックジョークを教えてもらいその構造を体得した。

彼は私にとってジョークやインドネシア語の先生であったのみならず、インドネシアのマランに滞在中には家族ぐるみお世話になった。この思い出深い恩人の彼は55歳で亡くなってしまったので、もう彼とジョークの応酬はできない。つくづく残念だ。

++逆ネジ++

1987年にインドネシアの東ジャワ州のスングル(Sengguruh)水力発電所の建設工事に従事していた時の事だ。

Joint Venture を組んでいた現地のコンサルタントにインドネシア人のITエンジニアがいた。こいつは性格が悪く、いつも他人をバカにしていたので従業員全員から嫌われていた。

私がパソコン室の社有マッキントッシュで仕事をしていた時、現地コンサルタント所有のPCパソコンが壊れたのでこいつが修理にやってきた。黙って修理していればいいものを、熱心にパソコンに向かっている私に話しかけてきた。

「俺はパソコンを直せるし電卓なんか壊れてもちよいちよいで直せるんだ」と。

相手を見てから話しかけろよ、と思ったし、うっとうしいのでこう答えた。

「そうかすごいね。君は電卓が壊れたら直して使うのかい？ 僕は新しいのを買うけど」と、事務所中に聞こえるように大きな声で。

これを聞いていた事務所の全員が爆笑の渦に巻き込まれた。

嫌味な奴には相当に辛辣なことを言っても現地の仲間は留飲を下げるだけで、キミは嫌がられるどころか人気が出るし、何年後でも彼らはこの話を蒸し返して笑い転げることは確実だ。

++タピオカとチーズ++

Singkong dan Keju (タピオカ芋とチーズ)という名の歌が1980年代にインドネシアで流行した。タピオカは貧乏人を象徴する食べ物で、チーズは金持ちを象徴するものだった。僕はタピオカ男で君はチーズ女。そんな女に「好きよ」と言われてもきみと趣味が合わない。僕の好みはタピオカ女なんだ、という歌詞だった。

上記のシングルダムの事務所にいた時に秘書が里芋を事務所でふかしてくれた。それを恐る恐る持ってきて「うちの畑で取れた里芋なんですけど食べていただけますか」と。「喜んで! 里芋は大好きなんだ」というと彼女はげげんなそぶりを見せた。

インドネシアでは里芋はタピオカ芋と同様な救荒作物で貧乏人が食べるものと決まっていたからだ。

「ミスターはお金持ちなのに里芋が大好きなんですか?」と彼女。

「そう、チーズは若い時に食べ飽きたからね」と私。

これを聞いていた事務所の人たちは笑って食べかけの芋を胸につかえさせた人もいたほどだ。

++缶詰と開頭手術++

1999年にスマトラ島南端のランポン州のウェィスカンポンダムの現場にいた時に、仮排水路トンネル工事を監理していた同僚の一人が数日間激しい頭痛に襲われたのち首都のジャカルタに運ばれて診断を受けたが原因不明だった。当時ジャカルタに駐在していたH君がこの同僚の写真を持って後述の心霊治療師(魔術師)のもとを訪れたところ、お祓いをしてくれて「もう心配ない」とのことだった。この魔術師の話で

は、トンネル工事を請け負った業者にこの同僚がひどい仕打ちをしたため呪いが掛けられるまでに至った。しかしながらこのお祓いでこの呪いは一匹の虫に変えてしまったので虫さえ除去すれば問題ないとのこと。

同僚はこの日のフライトで東京に戻って診察を受けたところ頭の中の虫を取り出す必要があると決まり、さっさと開頭手術が行われた。術後の経過は順調で手術の半年後には現場に復帰することができた。しかし、大手術の影響かこの同僚には以前の元気さが見られなかった。ここまでが背景である。

この同僚の元気のなさを見たインドネシア人の賄いのおばちゃんが寂しそうに、「人間の脳も缶詰と同じなのね。一度開けたら長持ちしないのね」と。

ちなみにこの同僚は幸いにしてこの事件から 25 年後の今もちゃんと生きています。

++フライドチキン++

2006 年にインドネシアのスラカルタでの仕事を終えたので同僚を誘って、私の送別会を開いた。もちろん全額主催者負担だ。

食事も終わりに近づいてきた時、手の届かない位置に私の分のフライドチキンが残っていたのに気づいた。

ちょっと目を話しているうちに、その前に座っていた一番若いフレディ君がそれをむしゃむしゃと食べ始めた。気づいた時にはすでに半分は彼の胃の中に納まっていた。そこで、

「フレディー、そのチキンうまいか?」と尋ねると

「うん、とてもうまいよ」と。間髪入れず

「だって全額、俺持ちだからうまいはずだよな」と、これに全員大笑い。

笑いが静まったあと、小さい声で

「そのフライドチキンは俺の分だったんだからもっとうまいはずだよな」と。

更に笑いが。

++出稼ぎとクラシックカー++

1980年代は日本の経済成長が著しかった。その当時に「日本人はインドネシア人より金持ちだ」という言葉を良く聞いた。その裏には金持ちにたかろうとするのが彼らの行動原理が見え隠れしていた。この状況を打開すべく偏屈者の常として屁理屈をこねた。

「そんなことはないよ。日本人よりインドネシアの方が豊かだ」と答えた。その証拠はこれだ。

「まず第一に、両国間でどちらの国民がより多く相手国で働いているかという点だ。日本で働いているインドネシア人よりもインドネシアで働いている日本人の方が断然多い。貧しい国から豊かな国に出稼ぎいくことが一般的だから、インドネシアの方が金持ちなんだ」。

「第二に、両国で走っている自動車を比べてみるとよくわかる。日本では新型のチャッチイ自動車が多いのに対してインドネシアではクラシックカーが多い。クラシックカーは金持ちの趣味なんだよ」と。

何でもかんでも無理やり理屈をこじつけるところにおかしみが生まれる。技術士は何でも理由をつけられなくてはならないと、国家資格の技術士試験勉強で学習したから私はこんな性格になってしまった。皆さん、恨むべきは技術士の受験勉強であり私個人ではありません。「罪を憎んで人を憎まず」っていうじゃないですかあ。

++子供の躰++

2000年代にインドネシアのスマトラ島の南部の事務所で、インドネシア人のスタッ

フが何か大きな失敗をしでかしたようでインドネシア人のマネージャーがカンカンに怒ってやってきた。

「俺のグチを聞いてくれよ！！！！うちのインドネシア人スタッフはバカばかりで全く役に立たない。日本人は優秀なのにどうしてインドネシア人はこうバカばかりなんだろう」と頭から湯気を立てていた。

「海外で働いている日本人の仲間たちは日本人の中でも選ばれた人たちであるからそれなりの心配りはできるのが普通だ」と言おうと思ったが止めてこう言った。

「なあ、それはね。小さい時の躰に関係しているんだよ。」「ところで、粉を瓶に入れる時に底をトントンと叩くと粉が締まってたくさん入るだろ」と。

脈絡のない話には彼はきょとん。続けて、

「日本人は躰のためにビンタするのを知っているだろう。ビンタの振動が脳に達してキュッと締まるから pintar=利発になるのだ」。

ここまで聞いた彼はニヤニヤしだして「じゃあインドネシア人はどうなのさ？」

「インドネシア人は躰をする時にお尻を叩くだろ。お尻を叩くからその付近がキュッと締まって padai=上手になるのだ」。

ここでげらげら笑い出した彼は「ウソだあい。その証拠は」と尋ねてきたので一言。「anak banyak=子たくさん」と。

この彼は床に座り込んでそのあたりの床を叩いて笑い転げていた。これで彼の怒りはどこかに完全に飛んで行ってしまった。

その後、彼と会った時には自分の頬とお尻を軽く叩いてこの話を思い出して二人だけでニヤニヤしています。

++人生観++

「人生で最も必要なのは感情のコントロールである」とインドネシア人は考えている。確かに欲望のコントロールは大切である。

一方、日本人はインドネシア人から見たら信仰に基づいているのではないかとも思える姿勢で仕事に立ち向かっている狂信的「仕事中毒患者」であるから私は常々「日本人の宗教は仕事だ」と言ってきた。

こんな日本人の私が喫煙室で休んでいると、上述の「感情のコントロール」を主張しているインドネシア人の友人がタバコを吸いながらこうからかってきた。

「日本人は仕事中毒だとお前は言っているが、なんでお前だけここでタバコを吸って遊んでいるんだ」と。そこで。

「他の日本人はまだインドネシア文化に慣れ親しんでいないが、俺は違うんだ。インドネシア文化が教えるとおりに、しっかりと欲望のコントロールをしているのが分からないのか？ 仕事をしたいという欲求のコントロールを」。

インドネシアで創作したものと聞き覚えがまだたくさんあるので、こちらを見てほしい。

http://omdoyok.web.fc2.com/Ah_Indonesia/Aind-16/Aind-16.htm

++浮気はなぜ甘美なのか++

インドネシア人の友人が尋ねてきた。

「浮気など宗教で『罪』とされている行為はなぜ甘美なのだろうか」。

で、こう答えた。

「それはね、罪とされている行為がまずくて苦い味なら、誰も行おうとしないからさ」。

「誰も行わなければこういう行為は存在しなくなる。すなわちこういう行為を呼ぶ単語がないってことよ」。

++料理をおいしくする調味料++

空腹は最高の調味料とはいうが、美味しいものでも一人で食べるとあまりおいしくない。

仲良しの友達と食べると大したものでもなく一段と美味しく感じる。これは友人という調味料だ。

友人が食事代を払ってくれる場合にはもっとおいしく感じる。これはいうまでもない。

でも結婚したらこういうべきだ。

「キミの愛情が最高の調味料だね」と。

++冷蔵庫++

1980年代の中東のシリアでの話。

シリアではダマスカスの人は都会の人で常識があり、その北側 140km に位置するホムス町の人は田舎者で常識がないといわれていた。

とある日、民族衣装を着てピックアップに乗った男性が首都のダマスカスの電気屋に乗り付けて店頭展示品を指して「この冷蔵庫は幾らだ」と店主に尋ねると、「ホムスの人には売らない」という。

次回この人が国際会議の用事でダマスカスを訪れた際に背広を着こんでベンツの乗用車で同じ店に乗りつけて「この冷蔵庫は幾らだ」と尋ねると、やはり店主は同じ理由で「売らない」と答える。

田舎者に見られたと腹が立ったこの男は正装をしてキャデラックで店に乗りつけ

たがやはり店主は「売らない」という。

恥を忍んでその理由を尋ねると店主はこう言い放った。

「あなたがホムスの人だってことは最初から分かっていたよ。だって、あなたが指さしたのは冷蔵庫ではなくてガスオープンなんだったから」。

++喫煙と老化++

昔のイランの田舎町での事。

喫煙をやめるように男たちに忠告している医師の前を、ゴホゴホ言いながらヨタヨタ歩いていく老人を指さして「みなさん、タバコをやめないと、あと 10 年もしないうちにああなりますよ」と。

やおら、一人の男が手をあげて。

「センセー、あれ俺のオヤジなんですけど」。

ジョークとはまともな論旨で進んで行ったあと、オチで聞き手が想像する続きと全く異なる結論で閉めることだ。ジョークの坂道を徐々に上がって行って、崖を落ちるように前の論旨と関係ない話題で終結させることであり、これをトポロジーの学者は「ジョークのトポロジー」と呼んでいた。これは落語の「考えオチ」にそれがよく表れているから若いキミは話術力の向上のために勉強することだね。

++ひとつひとつ++

今度はネパールのカトマンズでの話。

日本人の同僚宅を夕方に訪問したら、女中さんに「ウイスキーを持ってきて」と。ウイスキーが届いたら、今度は「氷も」と。氷が届いたらまた「水もね」という。

これを不思議に思って、尋ねたところ、

「二つ一緒に頼めば、一つは忘れる」

「三つ一緒に頼んだら……………、全部忘れる」

とのことだった。

インドネシアのヤンマーディーゼルで働いていた通訳さんから 1990 年代に聞いた話では、田舎のインドネシア人が日本人に話しかけられるとパニックに陥ってしまい、普段なら分かる話も理解できなくなるとのことだった。

確かにその傾向はあるが、上記の common sense の問題もあるのではないだろうか。

++一目上がり++

日本には「一目上がり」という落語があるがインドネシアにも似たようなものがある。

1 は Bhinneka Tunggal Ika 国是である「多様性の中の統一」

2 は Two-in-one 有名なシャンプーの名前

3 は以前ジャカルタで施行されていた Three-in-one ラッシュ時には自家用乗用車は三人乗りでなくてはならないという条例

4 は four-in-one で昔から叫ばれている dua anak cukup 子供は二人まで = 家族は四人までに

5 は five-in-one でインドネシア国民なら皆知っている Pancasila 五つの大原則

++語呂合わせ++

インドネシア語ではダジャレを使ったものもある。我々外国人の前では彼らはあまりダジャレを言わないが彼ら内部ではかなりのダジャレが使われている。この手の人はジャカルタか東部ジャワ州出身者に多く、中部ジャワの人たちはこういうことをあまり言わない傾向にある。

インドネシア人の竜頭蛇尾なのを皮肉って、tantangan menjadi tontonan (タンタガン・ムンジャディ・トントナン=挑戦がいつの間にか傍観に)や、Tulis-turis mancanegara (書く-諸国の旅行者)などがイスラムの説法師の Zainuddin MZ の講話で聞いたことがある。いわゆる語呂合わせである。

インドネシア人は書くのが嫌いだから記録をあまり残さないし、事実を検証するのは面倒くさいため勝手に想像して書いてしまうので、とんでもない記録ができてしまう。

この故 Zainuddin MZ はジャカルタの原住民である Betawi 人である。彼らはダジャレが好きなのでありこんなことが言われている。

Apa boleh buat! (仕方がない)を

Tahi kambing bulat-bulat. Di minum jadi obat (ヤギの糞は丸い、飲んだら薬になる)と言ったりする。

日本語の「あたりきしゃりき、車引き。ブリキにタヌキに蓄音機、……………」と似たようなものだ。

世界中のどの国でも香具師はちょっとしわがれた声で似たような抑揚で客を集めている。この声と抑揚が通行人を引き付けるのかもしれないね。

++「ンタ」+++

「ンタ」を使った駄洒落、ink cartridge と pacar (恋人)は一文字違いというのを作った。

Ink cartridge; habis TINTA tinggal buang. Sedangkan Pacar: habis CINTA tinggal buang.

意味は「プリンターのインクカートリッジはインク(Tinta)がなくなれば捨てるだけ。そして、恋人は愛(Cinta)がなくなれば捨てるだけ」。

++「ゲン」++

Bapak pikun ババ ピクン= お父さんがボケた

Ibu bingung イブ ビグン= お母さんはどうしてよいか分からなくなった

Anak tersinggung アナツ トルシングン = 子供たちは気が滅入る

++ニキビの発展型++

まだある。約 45 年前に中学生だった時から知っているインドネシア人の女性に
Jerawatan menjadi cerewetan! ジェラ「ワタン」・ムンジャディ・チェレ「ウエタン」

「ニキビ面が口やかましくなったね」と。

もちろん睨まれました。

++余裕++

先日開催された 75 歳記念の高校同期会の席上で 57 年ぶりにあった同級生の女性に「よかったね。あなたは金銭的にも時間的にもたっぷり余裕ができて……。お肌的にも」。

こんなことを言うから「ジジイ何言ってんだ」と憎まれるのはわかってはいるのですが、ついつい言葉が口を突いて出てしまう。

綾小路きみまろはこんな悪口を言って金儲けしているのだから、尊敬せざるを得ないのである。

++病気になったら++

2000 年頃にパダンのアンダラス大学の教授と雑談していたところ、彼はこういう。

「ムスリムは病気になったら医者に行くのが義務(wAJIB)なんだ」。

僕はこう言い返した。

「医者に行く金がなかったら？」

「ん？」

「それは運命(nASIB)なんだよね！」

++50ドル札++

2008年9月のベトナムのハノイでのこと。

私はこの前年から親友であるネパール人の同僚と巨大多目的ダムの子ンラ水力発電所の建設工事に従事していた。ダム現場の宿舎でベトナム・ドンに両替してあげた彼の50ドル札を持って帰国のために彼と共にハノイに降りた。

ハノイで別な仕事をしている彼の友人とともにレストランで昼食をとった後、彼らも支払うと言ったのだが、ここで件の50ドル札を見せて、一言。

「これは君の50ドル札だったじゃないか」と。

この時彼らは大学生の子供たちを抱えていて学費で大変だったのを知っていたからだ。

++バーナード・ショー++

ちょっと皮肉屋で話がうまい亡父がこんなことを話してくれたことがあった。

アイルランドにバーナード・ショーという有名な教育家であり、劇作家であり政治家でもあった有名人がいた。

バーナード・ショーが米国に行った時にハリウッドの美人女優がこう語りかけた。

「あなたのような素晴らしい頭脳の持ち主と私のような美人が結婚したら、頭脳明晰で美男子や美女の子供ができるでしょうね」と。

バーナード・ショーはこう一言。「生まれた子供がその反対になったらどうする?」と。

バーナード・ショーの実物写真は wikipedia で見てください。

++「まだ」と「もう」++

シーバスリーガルの瓶に半分残ったウイスキーの写真がコマーシャルに掲載されていた。そこに一言。

これがキミのシーバスなら、「もう半分しかない」とおもうだろう。でも友達のシーバスなら「まだ半分ある」と思うはずだ。これがシーバスリーガルだ。

人の心をくすぐる秀逸なコピーライトである。

++「罪作り」 その 1++

諸宗教では、この世での仕事が全て終わった時に天に召される、と教えている。特に一神教では「罪」の意識が高いので、「罪」が上限まで達すると死ぬことになることと広く信じられている。楽天的だと思われるインドネシア人が特にこう考えているようだ。

「日本人はいつまでも若い。その秘訣は」とインドネシアでしばしば尋ねられる。

中華系を含めた現地の人達に比べると日本人は確かに平均して若く見えるのみならず仕事も若者以上にちゃんとできるのである。そこでいつもこう答える。

「日本人の長生きの理由は常に不足しているものがあることによるんだ」

日本人は何一つ不足しているものがないと思っているインドネシア人は不思議そうに、

「何が不足しているの?」と。

「それは『罪』なんだぜ」。

(裏の意味) だからインドネシア人は早死になんだ。ヒヒヒヒ。

++「罪作り」 その 2++

世の中に楽道家は常に存在する。人生とは罪を重ねることだと考えているインドネシアにはこう考える楽道家がいるそうだ。

転んで腕を折ってしまった。それでも彼は、

「足は何ともないから、仕事に行ける。ああ、アッラーありがとうございます」と。

悪いことは続くもので、今度は側溝に落ちて足を折ってしまった。それでも彼は、

「車椅子なら仕事に行ける。ああ、アッラーありがとうございます」と。

さらに悪いことに手足の骨折の治療中に彼は交通事故で死んでしまった。それでも彼は、

「ああ、これで罪を重ねることがなくなった。ああ、アッラーありがとうございます」と。

++「罪作り」 その 3++

インドネシア人たちは友人・親戚たちの誕生日を楽しみにしている。誕生日を祝われる人が費用の全額を負担するからだ。

インドネシア風に考えると、長生きすればするほど罪を重ねることになるのに親戚友人が一堂に集まって長寿を祝うということはどういうことなのだろうか。

年を取って罪を重ねることで、自分たちが天国行ける可能性が高くなるとでも考えているのだろうか。

++給料と女房++

「稼ぎに追いつく貧乏なし」とは昔から言われているが、実際にはどうなんだろう？

「女房を満足させられる給料は地球上には存在しない」というのが実態ではないだろうか。

ちなみに我が家ではこういうことはなかったけど。

それは……………、私の給料が高かったのではなく、家族が我慢していたからだ。ごめんね。

++++

以上は、人の心理をくすぐるとともに、オチで人を笑わす技術の研鑽の結果だ。これに上達すればどこの国の人にもモテることは確実だ。

キミたちもこういう練習をすればよい。その動機はもちろん「不純」でなければならない。だって、マトモなことを話したって誰が楽しいと感じるだろうか。

清純な動機で長期間にわたって研鑽を続けることができる人は存在するが、その数はわずかであり、人は彼らを「変人」と呼ぶ。凡人のキミが研鑽を続ける為にはどうしても不純な動機が必要なのだ。そして君よりも少し頭の良い楽しい友達を見つけることだね。たとえその友達が早逝してしまっても彼はいつまでもキミの心の中で生きていて語り掛けてくれるから。

こんなことを一カ月半にわたって延々と話しているこの私も変人の一人なのかもしれないね。

(2023/11/27-2024/01/14)